

盲ろう者支援～光と音 言葉を届けたい

先進的ケア・ネットワークシステム開発研究 二木 悦郎

法の中に「盲ろう」の定義がなされていないところに、盲ろう者の支援遅れがあると思います。

現在私の働いている社会福祉法人の母体は「盲養護老人ホーム」です。全国でも珍しく、各都道府県に1から2施設くらいしかありません。視覚障がいがあり、65歳以上の高齢者。経済的に又は社会的に保護が必要な方が措置制度で入所してきます。

盲ろう者に関しては話聞いたことはありましたが、実際にまだ出会う機会がなく支援方法は気にしておりませんでした。しかし、当施設の利用者さん方も高齢化が進み、耳が遠くなってきている方も出てきております。当施設は全盲の方から弱視の方までいらっしゃいます。先天的に障害があった方。途中で障害になった方。支援方法も違いまして、大河内先生が言われるようにニーズが変わってきます。

講義を聴きながら一番興味があったのは、先天性的に盲ろう者となった方の通訳介助です。言語がほぼない中での通訳は細心のルール化が必要であると感じました。子供に言葉・文字を教える以上に時間と労力が必要ではなかろうかと。今度その辺を詳しく教えていただければと思います。

現在、福岡県盲人協・全盲老連と連携しておりますが、協会も視覚障がい者を全て把握し切れているわけではないと言われておりました。盲ろう者の掘り起しに苦慮していることに課題があると講義の中でありましたが、視覚障がい者だけでもそのような状況です。

特に高齢者で入院先から施設への紹介されるとき、視覚障がい者の支援の仕方のわからない施設に行かれる方々がほとんどです。又行政の措置控えの問題もあります。

私たちが当事者の方々と協働できることは、たとえ視覚を失っても豊かな生活を最期まで送っていただくことです。施設であっても、在宅と同じ。そういう施設にしていくことだと思っております。実際にガイドヘルパーを使って自由に外出・外食。旅行にだって行ける。大河内先生の研究のおかげで、映画に行く利用者さんもおります。

今後盲ろう者の入所相談ということもあろうかと思えます。その時は全面的に協力できるようにします。私たちが「光・音 言葉を…」

今後とも盲ろう者の支援法等ご相談させて下さい。

最期に私も大河内先生と同じ1973年生まれの43歳です。

本日は貴重なお話ありがとうございました。